

イギリス水禽協会巡り (5)

内 田 映

ー カーライルのホテルと パブのことー

12月28日午後5時半に着いたカーライルのホテルは、Crown and Mitre Hotelと言った。直訳すると王冠と司教冠ホテルということになる。2階の部屋に入ると、スチームが通っていて暖かい。午後7時半夕食で、食堂に入ると、年増のウェイトレスが、いきなりコンニチワと言ったのには驚いた。そして席へ向う私について来て、今のような時には日本語では、どう言うのが適切な言葉かと問うたので、コンバンワがいいでしょう。それは英語の Good Eveningに当るでしょうと答えた。彼女は更に、アリガトウ、サヨウナラ程度のことも知っていた。ロンドンから北方500キロ、スコットランドに近い所のホテルで、日本語を聞こうとは全く予想外のことであった。聞くところによると、以前にホテル従業員実習の為に、日本人が来たことがあり、その時に習ったとのことであった。大きなマントルピースの上には、日本から来た絵葉書が飾ってあった。

食後、付近にパブ (Public house) があるから行ってみようではないかということで、皆の後について夜の町に出かけた。パブはイギリスの有名なものであるので、一度は見ておくことにしたのだった。外は近くでも寒いだろうとジャンパーを着て出てよかったが、元気のいい人たちは、そのままの服装で出かけた。ホテルを出て、少し行くと大きな教会のカーライル、カシードラル (カーライル大聖堂) は、地上芝生から投射された電飾で夜目にも美しく浮き上がっていた。更に少し歩いていると、道路の向い側にパブはあった。小さいドアをあけて中に

入ると、狭いL字形の部屋で、煙草の煙が蒙蒙と立ち込めていた。中心にカウンターがあり、男が2人いて、注文のアルコール類を瓶又はジョッキで呉れる。後の棚には、飲み物の沢山の種類がならんでいた。つまみ物も袋入りのものが沢山あった。狭い室内には、少しはテーブルと椅子があるが、多くは立ったままで、ビールの小ジョッキを持った若い男が多く、女性も混じっていた。椅子のあいた所へ坐って、小ジョッキのビールを飲みながら、初めて見る本場イギリスのパブ光景を見ていた。矢張りパブは、この国庶民の社交クラブであることを眼の当りに見たことだった。別に酔いしれた様な者も居らず、喧嘩めいたこともなく、このパブは言わば若い男女のビールでも飲みながらのたまり場、よく言えば社交場のような雰囲気のような場。皆と此所を引き上げて、ホテルへ帰ると、更に地下のバーへ行く者もいたが、私は一人別れて部屋へ帰って寝に就いた。

ー カシードラルへ寄るー

12月29日、気持良く楽しく過したクラウン・アンド・マイター・ホテルとも別れて、特別バスに乗ろうと、玄関に出ると、Cathedral (大聖堂) を見に行くと数人が歩き出したので、私も後をついて行ってみた。道路に面した所は、昨夜電飾の光景を呈していたが、入口は建物の左横側を入った中程にあった。屋内に入ると、未だクリスマスツリーは残り、正面には聖人像の多数の色硝子が美しかった。このステンド・グラスの下近くの所に販売台があって、金色、銀色の首飾り十字架、絵葉書その他が売られていた。付近に喜捨箱もあった。買いたいが、未

だ教会の人の姿は見えない。値段のついた小紙片が貼ってあるので、欲しいものは自由に求めて、その代金は、この喜捨箱に入れるのだろうか、それにしてもおかしい節々もあると、数人で話合っていると老婦人がやって来た。ここを訪れた記念までに銀色の十字架と絵葉書を買った。尚このカシードラルは、小さい方だが、然し建築学的には数多くの見所があるという。

バスへ戻り9時半出発、最後の三つ目の水禽協会(The Wild Trust)のカラベロック(Caerlaverock)へ向った。カーライル古城を近くに見ながら郊外へ出る。この古城は11世紀の建物で、ノルマン式築城の典型として知られるという。

—ミヤマガラスを見ながら—

牧草畑に白鷺が1羽いるのが車中より見られ、コサギより大きく思えたが、種の判定までには至らなかった。スリムブリジのマシェウス博士の話では、稀な鳥として日本のトビと同種だが異亜種のトビが、かつてはイギリスにも居たが、今は見られないという。それでマ博士が11月に日本を訪れた時には、沢山のトビを見て喜んだということである。またアカトビ(Red Kite, *Milvus milvus*)も稀な鳥としていたが、これも現在は見られないという。

やがて日本では見たこともない物凄く太い煙突が4本程ならんで煙を静かになびかせているのが見えた。これは石炭発電所の冷却塔であった。そしてイギリスの発電所は、75%が火力(石炭)発電所、16%が石油発電所、残りの10%弱が原子力発電所であるという。原子力発電が最も安価な発電であるが、英国は石炭が豊富で今後200年も発電が出来るので石炭を使用しているという。更にイギリスの北海油田の石油の大々的開発も近いという余裕ぶりである。

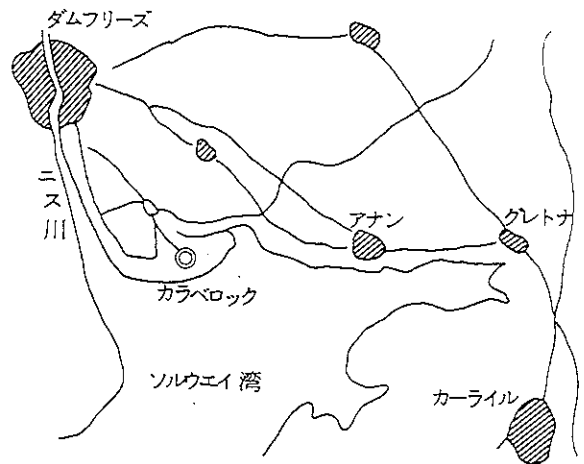
走り行く車窓の右側にカンバ類、ナラ類の壮令林が現れたと思っていると、ミヤマガラス

(Rook, *Corvus frugilegus*)の巣が幾つとなく高い梢にあるのが見えた。次いでこの林を過ぎたところの牧野には、ミヤマガラスの群が草生地でしきりに餌をあさっていた。

スコットランドに入って10時40分にカラベロック水禽協会に着いた。ここへ着く前の牧草地の上では、ホシムクドリ、ヒワの類、ユリカモメの群が飛んでいるのが見受けられた。

—カラベロック水禽協会保護区—

カラベロック保護区は、ダムフリーズから11キロ余離れたソルウェイ湾北部海浜に位置する国立自然保護区の一部を含む400ヘクタールである。



気持の良い展望台、観察塔、隠れ観察小屋は、総べて途中に体を隠しながら入るようになっている。従って此所で休んだり、食物を採ったりする多くの水禽類を間近に見て、素晴らしい光景を観察することが出来る。

カオジロガン(1976/7に7000羽以上)コザクラバシガン(3000羽以上)ヨーロッパムナグロ(5000羽以上)の巨大な群は、この保護区で9月から3月までの期間の大部分を過す。またコハクチョウ、オオハクチョウ、ミヤコドリ、タゲリ、ダイシャクシギ、ハマシギ、ハイイロ

チュウヒ、コチョウゲンボウ、ハヤブサ、チョウゲンボウなどは定期的な訪問者である。

スリムブリジ水禽協会発行の Wildfowl 28, 1977 によると、カラベロック保護区昭和51-52年冬の水禽類の渡来状況は、次のようである。

カオジロガン(7200羽)コザクラバシガン(4000羽)ハイイロガン(125羽)ヒシクイ、グリーンランドマガン、ヨーロッパマガン、ハクガン、コクガン、白鳥類ではオオハクチョウ(36羽)コハクチョウ(22羽)、鴨類ではオナガガモ(400羽以下)ヒドリガモ、マガモ、コガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、オカヨシガモであり、他にヨーロッパムナグロ(2500羽以下)ハマシギ、コオバシギ、ダイシャクシギ、タゲリの数千羽、ミヤコドリ(7000羽)が、キャンベル氏の報告で記述されている。

ーカラベロック保護区の観察ー

特別バスから降りると、車庫の屋根にヨーロッパコマドリ(Robin, *Erithacus rubecula*)が1羽いて、じっと動こうともしなかった。このマネジャーのコリン・キャンベル氏の案内で、直ぐ傍の第一観察塔へ上った。

遙か彼方にソルウェイ湾が広がり、こなたには400ヘクタールのカラベロック保護区が展開する。そのうちの一部は、ソルウェイ湾浜辺に位置するカラベロック国立自然保護区の一部でもある。

大観すると所々に池沼がある草生池が茫々と見えるだけであるが、眼下には白鳥その他が見える円い二つの池が隣接していて、池畔には第2の観察塔が建っていた。更にもう一つの第三の観察塔が遙かの湿生植生原の中に見えた。観察していると、ずっと向うの草生湿地の中にカオジロガン(Barnacle Goose, *Branta leucopsis*)の群もいた。このあたりの土地

は、農場主の伯爵よりの借地であるという。そう言えば、この塔の周りには、農家の古い建物が数々あった。

観察塔の中で、一通り眺め終った私は、キャンベル氏に、此所へ来る白鳥は、どの白鳥が一番多いか、Bewick's(コハクチョウ)か Whooper(オオハクチョウ)か、何れかと問うてみた。彼は、ここの白鳥は、オオハクチョウが多く、次いでコハクチョウで、コブハクチョウが一番少いと答えた。そしてオオハクチョウは、アイスランドから来ると言った。また今年のコハクチョウが多くて、30羽にもなったことは珍しいとも言った。

1971年に人工築堤と隠れ観察小屋が造られ、その頃には白鳥類、鴨類、雁類が27種、渉禽類が26種を数えられたという。水禽類は夜には沖の方の水の上で眠り、昼間は草地や池に來ている。そして食餌を撒くようになったら野鳥が多く来るようになった。オオハクチョウは、59羽を数えたのが今冬の最大数であるが、嘴の暗灰色のオオハクチョウが5年間程毎冬渡来している。またスコットランドの西北区には、300~400羽のオオハクチョウが渡来している。尚此所は、9-5月までオープン、夏は閉じている。

以上のような説明をキャンベル氏から聞いて、第一観察塔での観察を終えて、一行は下へ降りて並木道のある一直線の道路の方へ進むことになった。丁度フィルムの入替となったので、道路遮断の鉄柵の所で新しいフィルムを入れ終って、先の一行の後を追って前方を見ると、人の群が行く。この一行をてっきり我々の一行と違って後を追うことにした。一直線の道だし、間違えることもないと思って、途中の両側に赤い実のなっていた灌木に止まっていたヨーロッパコマドリやクロウタドリの写真を撮ったり、観察するので遅れ出した。然し前の方を見ると距離は離れるが、一行の姿は見える。よしよしとば

かりに後を追いながら行く。第三塔の見える所に来ると一行の姿が見えなくなった。塔に入ったものとばかり思って、塔の中に入り梯子段を上った。横長の細い観察窓にいる人々の顔を見ると、一人のメンバーもいない。こりゃおかしと降りて、塔の外の両側を見ても、何所へも通ずる道はなく、塔で行き詰りである。従って此所より前の方へは抜けられない。考えてみると、今まで歩いて来た並木道の両側の人工築堤に何箇所かに小さい隠れ観察小屋があったので、ここから前面へ抜けたのではないかとも思って観察塔より後戻りして土堤へ上り大観したが人影は見えなかった。この土堤へは上るべからずという立て札があるので、さっさと土堤を滑るように半分程降りた時に、塔より若い男の英人がやって来て、あなたの一行はあちらだと、元来た道の方を指差して教えてくれた。そうだったのかと有り難うと言って、今来た一直線の道を一人で引き返した。

戻る道は、両側の並木の大樹も、また赤い実の灌木も見ると余裕もなく急ぎ足となり、来た時と違って一人となつては、いささか不安気も起きる。ままよ、どうしても見つけられぬ時は、乗って来た特別バスの中で休んでいようと、向い風の中で、煙草を一服吸いながら歩く。二人連れの年を取ったスコットランド英人が来たので我々のメンバーのことを聞いたが分らなかった。歩いていると今度は、子供が一人やって来たので一寸聞いてみたが、言葉が通じないのか、子供で返事が出来ないのか、ただ子供は笑顔でいるだけだった。

やがて第二塔のところまで帰ったので、ここをのぞいてみようと思つた。建物に入ると、此所に一行がいて、裏側の部屋で池面の水鳥を観察していた。池の縁近くにコブハクチョウ、オオハクチョウ、それに少しだがコハクチョウもいた。勿論カモ類もいた。やっとのこと一行と一緒になれて、落ち着きを取り戻し写真を撮り出した。

白鳥類のほかには、ホシハジロ、ヒドリガモ、マガモ、クロガモ、スズガモ、ツクシガモ、マガン、カオジロガンなどが観察された。此所は、この観察室に印刷物や絵葉書位を売っているだけの小仕掛のものであった。印刷物を買っただけだったが、勿論売子もいなく、キャンベル氏一人で取扱っていた。スリムブリジのマッシュウズ博士へ進呈して来たものと同じ松江で買ってきた例の着物姿少女貼り絵の小さ色紙と中海のコハクチョウの絵葉書をキャンベル氏へプレゼントしたら喜んでくれた。

次いで移動となり第三の観察塔まで歩く。私は前述の失敗のように既に行っていたが、然しもう一度一行の後に続いた。第三観察塔よりの帰途、例の並木の広葉樹の大木と、垣根で続く樹高2~3mの赤い実のなっている灌木の名称をキャンベル氏に聞いてみた。そして手帳を出して書いて貰ったら、大樹はSycamore Tree、赤い実のなっている灌木はHawthorn Treeとあった。渡英後、買っていた植物の図鑑類で調べてみると、大木はセイヨウカジカエデ(*Acer pseudoplatanus*)というカエデ科の植物であった。また長い生垣の灌木は、バラ科のサンザシ類(Hawthorns)のCommon Hawthorn, *Crataegus monogyna* (仮称ヨーロッパサンザシ)と思った。

セイヨウカジカエデは、ヨーロッパの西部、中部、南部の丘陵地帯から1500mの山岳に天然分布しており、北方の分布はバルチック海には達しないが、他の所では多く植栽されて、今では遠くシエトランドや南部スカンジナビアまで野生化している。ヨーロッパの広葉樹で最も大きくなる種類である。涼しく湿気はあるが、水はけのよい土壌を好み、山地の谷、斜面の森林とか山地河川に沿うて主に見られる。

イギリスでも野生化しているが、これは500年以上の前に移入されたものが、その後野生帰化したもので、大陸よりの輸入のことは、14

世紀の文献にも記されているという。数百年の樹令にも達し、樹高30-35m、直径150cmに達し、樹皮は灰褐色で平な皿状に剥げる。対生の長柄の葉は心形、5-7浅裂、不整粗鋸齒があり、上面は深緑色、下面は灰色で脈上に軟毛がある。イギリスでは極めて普通の樹木で、森や並木、庭園樹、公園樹などに植えられる。材質は硬く、淡色で、立派な木目があり、家具、ベニア、楽器材としての用途がある。渦巻状の模様がある装飾材は非常に珍重される。

次にヨーロッパサンザシは、ヨーロッパのサンザシ類の中で、最も至る所にあるサンザシである。非常に変異があり、沢山の針のある2-10mまでの落葉性の灌木又は小木である。このサンザシは、藪の中とか又は森の縁に普通に見られ、そして草の生えた斜面へ侵入して行く。年々刈り込まれるか又は、小木としての成長が許されるような牧野の生垣又は道路脇生垣として植栽される。液果は輝いた赤色から紫色がかった赤色まで変化がある。樹皮は剥がれ落ちる。

暫くの間、一行の後尾にいて、キャンベル氏と一緒に歩いていた時、此所はイングランドとの界を越えて、スコットランドと思うかと話しかけると、彼はその通りだ、寒くはないかと思うたので、そう寒くは感じていない、私の住んでいる土地と同じ様だ、そして白鳥も沢山渡来していると言うと、彼はほほえんでいた。

特別バスに帰って、一行が車内に入ると、キャンベル氏は、わざわざ運転台横の車内まで入って来て別れの挨拶をした。そして“今まで来訪したグループの中で一番良いグループで、楽しく案内出来て嬉しかった。”とも述べた。車が動き出すと、彼は何回も手を振り、車内の我々も、真面目で熱心に案内してくれた、この青年に手を上げて別れを惜しんだ。

ーソルウェイ湾カオジロガン 繁殖の経過ー

次にマーチンメアー水禽協会の売店で買ったWetland Sceneという20頁の年少者達への水禽協会雑誌(1977、7月号)に、コリン・キャンベル氏の「ソルウェイ湾カオジロガンの幸せ」の一文が掲載されているので紹介しておきたい。

カラベロックの開水域を持つ草木湿地帯は、約80年前には1万羽までのカオジロガンの冬の安住場所であった。そして草生湿地で食物を採り、海の上に接したブラックシャウ・バンクでねぐらについた。然しながら、1948年頃群は300羽へと減少して絶滅へ向いつつあった。

“どうしてこんな事が生じたのか?” 疑なく主要な理由は、湿地帯での鳥撃ちが増えたことと、この前の戦争の間に射撃場として使用されたことであった。

その後、1954年の鳥類保護法は、カオジロガンの全本土での銃撃を禁止し、そして1955年には海岸地帯の草生湿地は国立自然保護区となり、イーストパーク湿地は特別保護区となった。

このことは劇的な変化を引き起した。何故ならば、その年に1000羽のカオジロガンが数えられたからだった。そして1960年代の初夏の頃には、3000羽が報告された。

カオジロガンは何所から来ていたか? この頃は、ガン類については十分に知られていなかった。例えば、ここに渡来のカオジロガンは、晩春に繁殖の為に何所へ行くのか知られていなかった。然しながら世界で、東部グリーンランド、北部ロシア、スピッツベルゲンの3分布繁殖地があるということを知った。更に興味ある疑問は、カラベロックの雁は、これらの地域の何れから来ているのかということだった? このことは、カラベロックか又は三つの地域の一つで、標識の環をつけられた鳥が回収された時

に、その答を知ることが出来るだけである。

1963年2月に316羽のカオジロガンが、イーストパーク特別保護区で、ロケット網設備で捕えられたが、そのうちの94羽が前の年スピッツベルゲンで標識の環をつけられていた。このようにして環が確認されることによって、これらの興奮させる発見は、ソルウェイとスピッツベルゲンを遠く標識の環をつけることによって確かめられたのだった。

1963年から1970年の間は、毎年約3200羽のカオジロガンが渡来していた。1970年にイーストパークを借りた協会は、地域をガン類やその他の水禽類へ更に魅力あるものにして、それらに不安を与えるようなこともなく、鳥類が見られるように一般社会の人々の為に施設を備えつけることを目指した。同時にカオジロガンの要求物を与えることに特に影響されると思われる調査プログラムを開始した。

イーストパークでは、農業の利害関係者、集約的草地管理の肉牛牧者 — 及び水禽類保護区は、幸福に併存した。これらの変化は、カオジロガンに適合してきて、1970年以来個体群は、7000羽以上にまでなったということ報告するのは嬉しい。1955年以来スピッツベルゲンでの法律によってカオジロガンの繁殖地とその保護に変化があるので、カラベロックでの変遷は、この幸な形勢へ貢献してきた。これが満足がゆく様に、カラベロックでは、スピッツベルゲンのカオジロガン保護者として、これらの鳥類が繁栄し続けるということを確認にしなければならない。協会では最近イーストファームの北部及び東方へ180ヘクタールの湿地と耕作に適する土地を購入した。これは結局、安全な冬を過す土地を加え備えることになるだろう。

— モンキーパズル

(チリー松)を見て—

車は来た道を引き返して、頂上に樹林を一寸

残した小山の背後に出る。牧野には羊の群が見られ、家も点在していた。だだっ広い牧草地が何所までも続いていた。小川の石橋をまた渡ったが、珍しかった。左側の家の脇に猿猴杉の枝の短いような高木を指して、松井博士が、あの木は何という樹木かと問われた。私はイギリスやヨーロッパには、天然性のない針葉樹で、オーストラリアあたり産の針葉樹ではないでしょうかと答えた。

先年オーストラリアで、これに似た木を見て、たしかナンヨウスギ科の *Araucaria* (ナンヨウスギ属) だったことを思い出したからだった。マーチンメア—水禽協会売店で買った「Trees in Britain Conifers and Allies (1973)」を見たら、*Araucaria araucana* が載っていた。英名は Monkey Puzzle とか、Chile Pine である。和名にはチリーマツ、チリアラウカリア、ヨロイスギ、アメリカウロコモミなど様々である。オーストラリア原産のナンヨウスギ (*Araucaria cunninghamii*) は、専門化された公園や庭園以外の町又は田舎で見出される樹木を対象とした此の小冊子には出てこない。

チリー松は、チリー、アルゼンチンの原産で、イギリスへは1795年に移入されて、前世紀の後半の間には、広く栽培された。大枝が5本から7本位幹から水平状に輪生して出て、葉は覆瓦状に配列着生して、長く枝上に留り、15年間も着いているという。そして樹形は球状円錐形で、材質はマツ類の様な軟材で、マツ類と同様な利用であるが、余りにも樹脂が多いので、イギリスでは植林はされない。並木、公園樹、庭園樹、記念樹などに用いられ、公園では独立樹或いは純林植込とされている。このようにイギリスの気候には強く、少ない南アメリカ樹木の一つである。

ニス・ホテルでの昼食

やがて大きな川に沿って車は進む。川を左に見ながら進むが、流れはどちらへ向っているのか気がつかなかった。右側は牧草地で、道路に沿う牧野の縁には、細長く広葉樹林が続いていた。ここで一寸書いておきたいのは、日本の牧野だと、冬の今頃は枯草の天然牧野が多く、特にかつて東北地方で見たのは、そうであったが、ロンドンを出て北へ500キロ以上のこの地に至るまで、イギリスの牧野は草が青々としていて、意外に感じていたのは、天然牧野ではなく、人工牧野で牧草を栽培している為だろうと思ったことだった。

小市街地が見え出すと、ここで車は止まって、午後1時に昼食の為にニス・ホテルに入った。川の望まれる広い食堂で昼食、ビールの小ジョッキを注文して渴をいやすが、未だ足りないので、ピエアー・ウォーターまで貰った。

ここはNith Hotel, Glencapleとあるところからみると、Glencapleという所だった。さっきのカラベロックの電話番号からも同様な所からみると、この小市街地とカラベロックは近く、それとニス・ホテルという名称からみて、ニス川の畔ということが分った。ニス川は、よく地図にも出るので、スコットランドもニス川まで入ったことを知り楽しく思った。

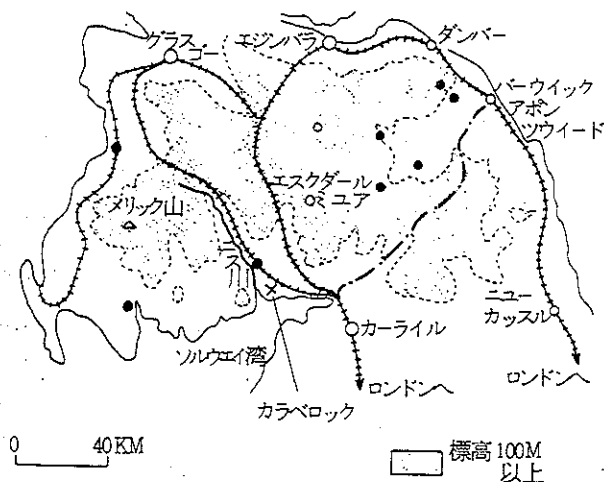
午後2時25分、晴、ニス・ホテルを出発、カーライルへの帰途に着いた。

スコットランド南部の地理

ここで折角スコットランドまで入ったので、以下K. B. Stephenson, 1973(中村和郎訳)を引用してスコットランド南部地方を述べておきたい。

南部高地は標高760mに達する人口稀薄な地

スコットランド南部高地と鉄道網



域で、また中央スコットランドとイングランド北部との間の陸上交通の障壁になっている。この地域を形成する岩石は、古生代のもので主に細粒の頁岩や粘板岩からなっている。いったん激しい褶曲を受けた後、浸蝕されて海面とほぼ同じ高さの平坦地になった。

この準平原は、その後隆起して高原を作った。ゆるやかな丸みを帯びた斜面になっていて、その高い所は600m余りの高さがある。西部には抵抗性の大きな花崗岩があって、メリック山では842mの高地湿原になっている。

この荒涼とした高原に深い谷を刻んで流れ出る川は、人口稠密地帯を通過して海に注ぐ。スコットランド南部では、気候の地域差が大きい。西岸は海洋の影響を受けて、冬が温和である。この海岸地方では、生育期間は長いですが、多量の水蒸気を含んだ西寄りの風が海から吹き込んでくるので、雨や曇りの日が多い。反対に東岸の冬は、ヨーロッパ大陸の上に発達する高気圧の影響を受けるので寒冷である。東岸は南部高地地帯の雨陰に当るので、降水量は少ない。

生育期間は短いけれども、晴天が続くので日照時間は長く、色々な作物の栽培が可能である。エスクダールミアは、南部高地地帯の標高244mの所にあるので、気温が低い。卓越する偏西風が山地で強制的に上昇させられるので曇りがちである。